

早稲田大学 早稲田キャンパス 3号館



計画概要

1933年に建設された早稲田大学早稲田キャンパス3号館の建て替えとして計画された。建物はキャンパス内でも特に景観継承を意識する大隈記念講堂を中心とした歴史継承ゾーンにある。計画では、歴史ある景観の継承、安全性の追求、環境配慮の3点に重点を置いて設計した。本計画では、キャンパス内のメインのモールに面した旧3号館南側部を再現している。新しい「再現棟」は竣工当時の建物のボリュームやプロポーション、素材感を活かした建物として計画し、それに先進的な14階建の「高層棟」を組み合わせ嵌合させる計画とした。それによりそれぞれの建物の性質の違いを活かし合い、歴史と未来が混ざり合う機能・空間をもつ新たな教育・学修の場を創ることを目指した。



建築計画と照明計画

「再現棟」の正面や外壁周りは、既設の器具を『復元』し、旧3号館の再現性が非常に高く、歴史を感じさせる照明計画とした。大隈記念講堂と大隈像を結ぶ歴史継承ゾーンに対して、十分復元することで、周辺の歴史継承を担っている。

「再現棟」室内のエントランスロビーや廊下は、厳密な復元ではなく、面影の『再現』とした。それは歴史を重ねていく中で、光環境も変化してきたためである。大隈記念講堂の照明イメージを取り入れ、人々の記憶に残る空間の『再現』とし、建築意匠を装った。

中央のエントランスホールは、当時の中庭の『再現』とした。「高層棟」とかみ合って内部化されたが、近代的な輝きのあるアトリウム照明とせず、当時の屋外としての見え係りを取り入れた。

また、歴史の流れを「再現棟」から「高層棟」にかけて、照明デザインにも変化をつけている。

大隈記念講堂と大隈像の間に建替えられた校舎が、かつての情景を未来へ繋げる景観継承を意識したエリアの中に存在する。



照明計画のコンセプト

Lighting Design

早稲田キャンパス3号館の“照明計画”は、人々の記憶に残る校舎の面影を守り続け、その歴史を未来へ繋ぐことをコンセプトとし、情景の再生を試みた。その方法として、旧3号館の照明器具の『復元』し、約70年前に竣工した当時の面影を『再現』することをを行った。この照明計画は建物空間と光環境の両方に調和し、総合的なデザインとして昇華した。

Technology

照明器具の『復元』と『再現』の設計は、昔ながらの照明デザインと新しい技術（LED化）を融合させ、近年の技術の投入を試みた。旧3号館の竣工当初は、主に白熱灯が利用されていたため、本計画にてLED化された特注器具で消費電力は1/10程度となった。近年、学びの場は明るい環境が求められているが、十分な明るさを確保し、意匠と機能の両方に優れた照明計画を実現した。

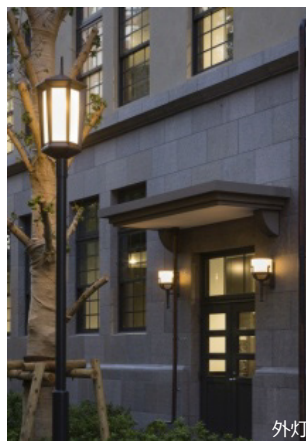
新しい技術を導入し照明器具を『復元』した事例

・ブラケット照明

旧3号館の解体時に正面入口の照明サンプルを採取し、採寸・色味の調査を行い復元を行った。今回、新しい技術の融合として、歴史ある昔ながらの器具にLEDを組み込むことを試みた。LEDは独特な光の広がり方を持つため、発光面に明暗が生じないよう、また色味や味わいに注意し製作した。結果、当時の建物正面の意匠が再生し豊かな装いとなった。

・外灯

歴史継承ゾーン周辺の環境に統一感を図り、既存外灯も復元を行った。LED化への試みとしては、既存の照明器具がHID系ランプが使われていたため、照明の色味など検討し、周りの景観を崩さないよう再現した。また、LED化による省エネルギーも実現した。



照明を『再現』し、歴史を感じさせる照明計画の事例

・ペンダント照明・ダウンライト

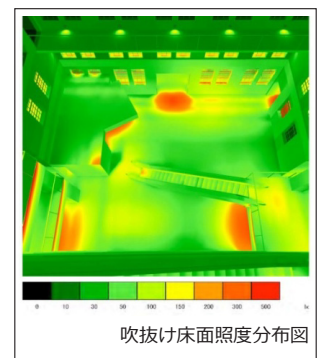
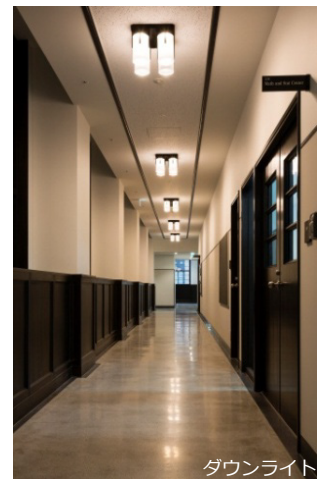
「再現棟」室内は、古風なペンダント照明とダウンライトを製作した。未来へ人々の記憶が受け継がれるように、歴史ある大隈記念講堂の照明器具を調査を行い、当時の情景再生を試みた。近代的な照明デザインとならないように計画した結果、入口から室内に入った際、建築意匠に調和し歴史を感じられる空間が実現した。なお、1934年から旧3号館は運用されているが、竣工当初の明かりは主に白熱灯が利用され質素であったが、時代と共に変化し、現在の明るさは特に重視されている。今回LEDを採用する際、特に天井と床の明るさを重視した照明器具を計画した。照明器具のデザインの印象や、明るさのシミュレーションは十分に検討を重ねた。室内の面影を装いつつ、明るく高効率で省エネルギーな快適空間を実現した。

・吹抜け照明

中央エントランスホールは、吹抜け上部に照明器具を見せないように計画とした。それは、もともと旧3号館では建物に囲われた中庭（外部）であったため、新たに照明器具を設けずその空間を『再現』した。

日中はトブライトから自然光が差し込み、明るいアトリウム空間とした。また、夜間は「再現棟」の廊下側から窓明かりが入り込み、あたかも当時の中庭にいるような情景を感じられる空間とした。窓明かりの光は、シミュレーションにて十分な検討を行い、室内で夜景の面影を再現できた。

また、エントランスホールは主動線としての明るさを確保するため、窓からの明るさ感を保ちつつ、ポイントとなる出入口周辺を明るくし、歩行者の動線に配慮した。



まとめ

本計画では、歴史を感じさせる照明デザインを保ちつつ、LED化という新しい技術を導入した照明器具の製作を試みた。照明器具の設計においては、単にLEDを組み込むだけでなく、光の広がり・色味・味わいをモックアップやシミュレーションで確認を行い、建物へもたらす明かりの印象については発注者および意匠担当者とともに検討を重ねた。その結果、建物空間と光環境の両方に調和した照明計画を実現した。